

令和元年度第1回丹波市総合教育会議 会議録

令和元年5月28日（火）午前9時00分～午前10時30分

丹波市役所山南支所3階 教育委員会室

出席者	市長	谷口 進一
	副市長	鬼頭 哲也
	教育長	岸田 隆博
	教育長職務代理者	深田 俊郎
	教育委員	中村 美穂
	教育委員	横山 真弓
	教育委員	出町 慎
	企画総務部長	村上 佳邦
	政策担当部長	近藤 紀子
	教育部長	藤原 泰志
	教育部次長兼学校教育課長	足立 正徳
	教育総務課長	足立 勲
	学事課長	前川 孝之
	文化財課長兼美術館副館長	長奥 喜和
	子育て支援課	上田 貴子
	教育総務課庶務係長	芦田 将司
	総務課秘書係長	藤原 勇

傍聴者 0名

## 1 開会

○村上部長 それでは皆様お揃いになりましたので、第1回総合教育会議を始めさせていただきたいと思います。

会議は10時30分を目途としたいと思いますので、ご協力をお願いします。

## 2 協議事項

○村上部長 次第の協議事項に移ります。「まちづくりと人づくりについて」市長からお願いいたします。

○谷口市長 それでは説明させていただきます。朝目覚めるとまず仕事のことが頭に浮かびます。今日はこういったことを話そうと思ったことをメモしてきました。「良くも悪くも4年間のくびき」としまして、私の場合は4年間の任期で選ばれています。

1番目の「真情を吐露すると」についてですが、1つ目は現状として私自身の心情はこういうことです、ということを書かせていただきました。任期の48ヶ月間のうち30ヶ月が過ぎました。日々、課題の大きさ、責任の重さを実感するわけですが、私自身が空回りしているという意識が常にあります。

2つ目が私なりの初心と成長と書きましたが、はじめはこう思っていたが、実態と少し違うな、と思うことがあります。大切なことは、基本軸はぶれてはいけないということです。

3つ目は私自身への批判の声です。手紙などでは時々ありますが、直接的には聞いていません。だからといって「裸の王様」のように慢心はしてはいけません。

4つ目は、仮に次がある、と思えば緩みがでるということです。それは絶対にしてはいけない。ただ、4年間で一つのことを完結しようとするとなかなか難しい。

2番目の「教委と首長の関係」であります。総合教育会議について文科省の資料を見てきたのですが、「政治的分業で地域の教育行政を行うシステム」とあります。不即不離あるいはつかず離れずというのが、首長と教育委員会の関係かなと思います。しかし、このシステムが阻害要因になっていないか、とも書かれています。責任の所在が不明確になるということです。自

治体と一体となった政策が必要で総合教育会議がある。簡単に言うと、基本は日常的に情報・意見交換を密にすることがなによりも大切ということです。

例えば、プログラミング教育というと2020年から全面実施と言われていきます。その準備はどうなっているのかということや、英語教育もそうです。あるいは道徳教育の評価をどうするか。簡単にABCや123とつけられるものではありません。こういうことがどのようにされているかということは、教育委員会の中では議論されているのでしょうかけども、私のところには伝わってきません。きちんとやっけてもらえれば、口をはさむことはないのですが、情報としては知らせておいてほしいのかなど。教職員の働き方改革が言われる中で、こういった新たな取組みが始まると否応なく負担が高まります。それが各所で軋轢を生じていないかということを考えます。

さて昨日、記者発表をしましたが、その前に色々な施策を進めていく際に、反対をする方というのは多い。この反対も特定の年代、地域などに偏らず、公平に聞かないといけない。いろいろな層の意見を聞きたいと思っています。

昨日の話に戻りますが、柏原高校の校長先生が音頭をとられて、氷上高校、氷上西高校と合同で生徒に話をされて、グローバル人材を育成していくための地域課題を研究していくという文科省の取組みに手を挙げられた。全国20校のうちの1つとなりました。地域課題となると市も当然協力をさせてほしい。単に研究するだけでなく、例えば高校生市議会のような形で市会議員と同じような立場で我々に提案をしてもらって、できるものはできる、できないものはこういう理由でできないということをしつかりと返す、そういったことが来年度あたりできないかと探っている次第です。

福祉の問題も大切ですが、若い人たちの意見もしつかりと聞くべきだと思いますし、将来その人たちの糧になるような我々と話し合うような場を設けることが必要だと思います。

資料で配りましたが、まちづくりビジョンというものを作りました。「未来に向けたまちづくりの方針」分野別「まちの姿」と「暮らしの姿」というものがあります。20年後はどういった町にしたいかという理想像があります。市民との意見交換会の中では「できないことを言っている」と言われる方もいたのですが、一般的に考えるのではなく、海士町で小学生を対象にやって

いるバックキャスト法を聞いたときになるほどと思いました。

夢を語るということが若い人には必須かなど。できるかできないかは次の話として、絵を描いてみてそれに向けて何が課題か、何をしないといけないのかというアプローチで考えてみるのが大切。「これから人口が減っていきます。どうしましょう」というアプローチの仕方は良くないのではないかと思います。

これから色々な方の意見を伺いながらしっかりやっていきたいと思います。5月の広報に載せましたが各町で意見交換会を開催しました。市島地域では小学校統合の話は慎重にしてほしいという意見がでました。このことも含め皆様とはしっかりと意見交換したいと思います。よろしくお願いします。

○村上部長 ありがとうございます。

それでは各委員様からご意見をいただきたいと思います。

まず、深田職務代理者からお願いします。

○深田職務代理者 ただいま市長からお話をいただきまして、私たちのほうからお願いするばかりですが、お話を聞いていて、小学生から高校生、その先の丹波市で生きる方法、学ぶ方法が少しずつ形づくられているのかなと思います。例えば留学。こういったことを通して小学生が地元を見つつ、グローバルな視野を広げていくという、東小学校でもオーストラリアへ留学をしています。国際交流協会を通じて市の補助があります。こういうことが少しずつ中学そして高校へと支援を受けながらグローバルな視点をつくることになっていると思います。

そういう思いがある中で、先ほど、プログラミング教育というのが話にありました。丹波市は情報教育に関しては相当早い時期から先進的に取り組んできています。ですので、予測困難な時代に向かっていくのですから、その切り口の1つとしてプログラミング教育がでたのですが、丹波市が持っている強みを子どもたちにより強い力を与えて将来に結びつけていただけたらと思います。

学校の情報教育は周回遅れということを知りました。というのはパソコンを導入したものの、そのパソコンが周回遅れになっている。できればいろい

ろな機器等も導入しながら最先端の教育を提供するのにお力添えをいただけたらと思います。

それから若い人たちに夢を与えるというお話がありました。具体的にどこに視点を持って行くかという話がありますが。最近病院に行くバスの運行表が新聞折込みに入っていました。高齢者が多くなってきた背景があるのですが、高齢者が病院を核にして動きやすい環境が見えてきた気がします。

次に、黒井城が今クローズアップされていますが、NHKの時代考証の方が来られて、八上城よりも黒井城のほうが映る時間が長いのでは、と言っておられたそうです。黒井城や明智光秀を中心にしているいろいろな取組みがあるのですが、黒井の町、周辺の城郭はこれを機に研究してはどうかと思います。それによって新たなことが分かり観光客が増えれば。そういったひきつけ方をしながらインバウンド含め丹波市で子どもたちや人が活性化していく何かしらの力になっていくと良いと市長のお話を聞きながら思いました。

○村上部長 ありがとうございます。続いて中村委員お願いします。

○中村委員 皆さんは、今日朝を迎えたときに「今日も1日が始まった。嫌だなあ」と思われたでしょうか。「今日も1日頑張ろう」と思われたでしょうか。

私は今日という日を当たり前のようには過ごしているのですが、人づくりまちづくりについて何ができるか考えてみたいと思います。

令和元年に生まれた丹波市の赤ちゃん、この子に関わっている周りの人の影響というのは非常に大きいのですが、今日あることが当然のように思えることが生きていくと、どんどん欲も増えてきて上へ上へと見てしまいますが、足元が見えなくなってしまいます。そうすると丹波市の良さが感じられず、ここに住んでいて毎日が幸せだと感じられることがなくなると思います。毎日が幸せだと思える人が増えると、その子も影響を受けて1日1日を大切にしていける子に育つのではと思いました。そして丹波市は山々に囲まれているのですが、この良い環境が当たり前になってしまっていて、気づいていないようになっていると思います。知らないまま「丹波市って良いのだよ」と伝えても、うまく伝わらないと思います。大人が丹波市を知ることとは、

とても大切なことだと思います。そして子どもが市を知る、市長さんがどんな方で、今どういったことに取り組んでいるかということを知っていくのは大事なことだと思っています。そして各小学校では今年度からコミュニティスクールが開催されています。このコミュニティスクールでは地域の多くの人と関わりを持つことができます。

この地域の人も子どもたちと学べるということで、とても良い取り組みだと思います。普段口に出して言えないことも、丹波市の歌ですが、普段言えないことも歌にしてなら言えると思います。これを歌だけでなく振付をつけるとか、言葉も広めていってもらえばいいなと思いました。

○村上部長 ありがとうございます。続きまして出町委員お願いします。

○出町委員 私からは3点お話しさせていただきます。

過日、神楽小学校の利活用の件でオープニングイベントがあったのですが、非常に子どもが多く来ていて、楽しそうに過ごしている姿が印象的でした。それは小学校という場所だからなのかと思いました。私も住んでいる場所が遠阪校区でして地元自治会で立ち上げている遠阪小学校の利活用計画の委員会にも入っています。同じように検討しているのですが、神楽、芦田と比べ苦戦しております。

原因はいろいろな要因があると思います。地域として頑張っていないかというとなんかそうではなく、地域と学校とつながりも強く、学校と良い関係だったのですが、いざ利活用となると苦戦しているというのが実情です。

そういったことを見ていると教育委員会の中では廃校になったあとはタッチしにくい。情報が共有されていない。地域でいざ活用しようとなったときに資料がないということもある。議論するにしてもなかなか核心にいけない。

これから市島でも同じような議論があると思う。統合という話と廃校活用はとぎれた状態で議論される。その情報がとぎれてしまうと遠阪が苦戦している理由だと思います。統合と活用を同時に議論するのは非常に難しいことだと思いますが、困っていることを整理しておくことが重要だと考えます。

選択肢を示すうえでも、今の状況を記録しておくのが重要だと思います。

2つ目は高校連携の話がありまして、グローバル人材というキーワードが

でていました。昔ヨーロッパを旅したときに、たまたま地元の中学校、高校生と同じバスに乗り合わせたのですが、日本人が珍しいのか子供が話しかけてきてくれて、英語で自分の村のことを説明してくれました。日本のこともすごく知っていました。そして私にどんな地域に住んでいるのかということを知りたいのですが、自分の国のことをちゃんとしゃべれない。向こうの子どもたちのほうがよっぽどグローバルだなと思いました。

海外のいろいろなことを知っているというのもグローバル人材の育成には重要なのですが、地元のことを理解して伝えられる人材こそグローバルな人材だというようなことを思うことがありました。今は高校でグローバル人材という話がありますが、丹波市のふるさと学をやりながら地域のことを小中学校からしっかり学んでいくというプログラムを組んでいます。高校も一緒になりながらうまく重ね合わせていける授業ができればグローバル人材の育成上、有益な授業が組めるのではと思いました。

最後に学校のあり方についてこの場で議論していく必要があるのではと思っています。3月の臨時教育委員会の中で山南地域の中学校統合のことを議論しましたがけれども、学校教育としての場としての中学校だけでなくまちづくりの中での中学校という位置づけについても議論も多くしました。学校のあり方についても学びでいえば、社会教育、生涯教育といろいろあります。その中で学校の施設というのはこれからとらえていく必要があると思います。

県でもいろいろな事業で連携があると思う。まちづくりビジョンの素案でも学びのエリア、核になるようなものが、位置付けがあっても良いと思います。

○村上部長 ありがとうございます。最後に今回からお世話になります横山委員をお願いします。

○横山委員 よろしくをお願いします。

私は、兵庫県立大学と青垣の森林動物センターに所属しています。今年度は大学院生がセンターに4人来ておりまして、青垣町に住んで野生動物の研究を開始しています。これまでも大学院生を受け入れておりましたが、センターの様々な体制が整いましたので、次は次世代の関係者を育てていこうと

ということで、大学院生を積極的に任用しているところです。修士の1年生が4名。来年度はおそらく修士の2年生が入ってくる状況です。学習意欲も高いのですが、これまでどういう教育をされてきたのかというと、基礎学力がまだまだという状況があります。彼らは野生動物の研究がしたいということで丹波に来てくれています。1人は中国からの留学生。先ほどのグローバル人材の話がありましたが、世界に飛び立つということを非常に考えていただいておりますが、逆に世界を丹波に取り入れることを考えていただきたい。

野生動物管理に関しては、兵庫県は先進的な取り組みをして全国に知られていますが、丹波はあまり知られていません。野生動物、生態系といった林業、農業、産業との共存のあり方を学べる東アジア唯一の場にしたいと思って活動しています。丹波の自然を大切にいただいておりますが、丹波の自然のどこが良いのか大人が全く知らないのが実態だと思います。人間の体というのは80%が水分です。それが丹波の自然から良いものが得られています。生きる基盤が得られるわけです。特に野生動物というのは害として見られており、害をなくすのは大切なのですが、この動物たちと共存していきたいと考えている若者たちが全国にちらばっています。是非、自然環境をここでしっかりと学んで、それを語れるようになっていただいて、世界に出て行ったり、帰ってきていたり、あるいは引っ張ってきていただくという流れを作りたいと思います。

その中で、残念ながら留学生が住む場所がありません。民間からは断られてしまう現実があります。幸いなことにシェアハウスに受け入れていただくことができました。非常にありがたいことだと思っています。

そういったことで、ここに呼び込める素地がいろいろとありますので、是非、活用していただきたい。中山間地域はまちづくりに都会的要素を入れようとされますが、今や都会的要素は、子どもたちは手のひらの中で容易に入手できます。ですので、立地を活かしたようなまちづくりを是非考えていただきたいと思います。

○村上部長 ありがとうございます。次に次第3の意見交換として、どなたからでも結構ですので、よろしくお願いします。



○谷口市長 先ほどプログラミング教育など新しいことが入ってくると先生方の負担が増えると申し上げました。このことについて皆様の見解をお伺いしたい。

○足立次長 まず竜学について報告させていただきます。場所は北海道むかわ町です。地震があつて行くのも心配したところですが、むかわ町の方の復興への努力と来てほしいという願いがありまして、なんとか実施することができました。丹波市から非常に離れており、車で70分、飛行機で100分、車で40分の場所にあります。目的としましては、資料にありますように4点です。

①丹波市と同じように恐竜化石が発見された北海道むかわ町を訪れ、発掘現場の見学と現地学習を行う。

②交流事業を通して丹波市の学習内容をむかわ町の授業に伝える。

③地震の被災地を訪れ復興に取り組む人々の思いに触れるとともに、防災や復興支援に自分自身ができることを考える機会とする。

④交流学习終了後には報告会を行い、学習の成果を丹波市に広く発信する。

これが目的として実施されております。

実施のスケジュールとしましては、昨年5月に学校に配布し、7月に参加者が決定しました。それまでに事前学習として理科の大地のつくりと変化の学習を6年生と5年生で行っております。現地学習として実際に現地に赴きまして実際に発掘体験などをさせていただいたりして事前学習をすすめました。11月には市長のもとを表敬訪問させていただきました。竜学は11月10日から12日まで行いました。その後は学びの足跡展の開催、それから竜学の報告会の開催、12月2日の丹波竜フェスタで発表させていただいております。

竜学の当日の日程は資料にあげさせていただいております。11月10日は歓迎式典、講演会がありました。11日には化石発掘現場の見学、博物館の見学を行いました。12日はむかわ町の小学校との交流、震災跡地の見学を行っております。

次に資料裏面をご覧ください。報告会での様子ですが、学んだことをまとめ、フェスタで市民の前で発表しました。丹波竜とむかわ竜の比較や、マスコットの違い、見学して得たことや事前学習したことなどを分かりやすくまとめて発表しました。

子どもたちが映っている写真は、むかわ竜の全身骨格を見せていただくことができまして、その時の写真です。

竜学を通して参加した子どもたちにとっては、この年代のときに自分の視野を広げる機会を持てたことは、この子たちの力を一層広げる機会になりましたし、この子たちは本当に恐竜に興味を持った子たちで、普段なかなかここまで学習することはできません。すごい力をもった個性を伸ばす機会となったと強く感じております。ミュージアムができたときに、そういったところで活躍できるような子になってくれたら、という願いを持っております。

また、12月2日の丹波竜フェスタに、丹波市の魅力を子どもたちの目線で発表できたことは聞いている方にとっても、丹波市の魅力をより分かりやすく理解する機会になったと感じております。たくさんの小中学生も来ておりましたので、その子たちにとっても刺激になったと思います。

またその子たちが帰った各学校でも成果を伝えておりますので、次の恐竜大使にチャレンジしたいという子が育って、夢を持つ機会にもなったと感じています。今後はこういった子たちが学びたいと思ったときに学べる環境の充実、例えばミュージアムもそうですが、バーチャル映像なども取り入れてこの子たちの力を伸ばしていけるような学びの場を用意できたらと思っています。また、教師もそうですが、こういったことを伝えていける後継者育成が必要になってくると感じております。

以上、竜学の報告とさせていただきます。

続きまして外国語教育の報告をさせていただきます。外国語はプロジェクトチームと研究室を作っておりまして、それを基に各学校のカリキュラムの作成に取り組んでおります。市長が心配されていた先生方の負担についてですが、国や県の主催の研修会があり、多くの先生が受講しています。また各校でもその指導法の伝達を行っています。中学校の英語の先生もおられるので、その先生による講習会やALTによるイングリッシュキャンプなども実施して先生方の負担のないようにしています。ALTや英語に堪能な地元人材の募集もすすめておりまして、ボランティアも集まってきておりますので、そういった方を活用した複数指導体制や、先生方が教えやすい教材をデータベース化して市内で共有するような仕組みを考えてすすめております。

それからプログラミングについてですが、2020年から本格実施が始まりますので、こちらでも研究室とプロジェクトチームでカリキュラムの作成等をすすめております。本年度中には実践事例に基づいてプログラミングノート及び指導書、プログラミング教育のカリキュラムを作成し、来年度からのスムーズな実施につなげたいと考えております。

先生方の研修についてですが、平成29年度から希望研修を行っておりますし、本年度は悉皆研修として、すべての先生がプログラミング教育について学べる機会を民間とも共同で実施したいと思い、そういった機会を充実させていくようにしております。また、環境整備ですが、子どもたちのポータルサイトにプログラミング教育の専用サイトを設置するとともに今年度からOzobotとMicroBotを40台導入し、校内研修や授業実践で活用できるよう整備をすすめております。以上、報告させていただきます。

- 谷口市長 話を聞くと良いことばかりのように聞こえますが、現場ではそうなのではないでしょうか。これだけ多くのことが入ってくると子どもたちも先生も家庭も大変なのではないかと。他の算数や国語への影響もあるのでは。その辺りはいかがでしょう。
- 足立次長 学校としましては前例踏襲、今まであるものをやることを目的化していて本質を見ていない部分があるので、当然のようにやってきた行事や学校の中の仕組みを見つめ直して削減すべき部分は思い切って削減していこうと話を学校ともすすめております。
- 谷口市長 スクラップしていくのって大変ですよ。そして新しい事業が次々と入ってくる。何度も言いますが現場は大変だと思うわけです。
- 鬼頭副市長 教育委員会から資料をもらったのですが、働き方改革の関係で、先生方の超過勤務が今どれくらいかというデータをもったら、教頭先生がとても多い。年間1,000時間。数え方にもよるのですが。小中学校の先生方でも中教審の方針では年間350時間、1月45時間ということながら400時間500時間という方がざらにいらっしゃる。その上に今回このようなプログラミング教育などということで、かなり本気になってやっていかないと400、500時間というのを下げていくのは難しいと思いました。

○岸田教育長　そういう意味では学校にも限界がある。先ほど次長が言われましたがプログラミング教育は非営利団体、民間が研修を、英語教育は地域人材を活用していく。そういったコミュニティ・スクールのように地域と企業のパイプをつくっていくか、地域や企業の人当事者意識をもってやってくださるといふか、そういうシステムをいかに作っていくかということと、今日はまちづくりと人づくりというテーマですが、それにつながっていくようなものがあるのかなと。まちづくりビジョンが示されていますが丹波市が描くこのまちづくりビジョンを実現し引き継いでくれる子どもたち。そういった力が求められているということも大事だし、その子どもたちを社会とつないであげる大人の魅力を見せていく、今の教育の中でいろいろな大人が関わることで「大人って魅力的だな」ということを子どもたちにどう感じさせるか。こういうことでプログラミングや英語という一つの教科ですけども、まちづくりにつながっていくことではないかなと。そういうことでいうと、まちづくりビジョンを形にしていくときの子どもたちに必要な力、あるいは地域の魅力や愛着をどう持たせるか。愛着や魅力を持たせないと子どもたちは見てくれないので、教育委員会だけではなかなか考えにくいので、こういった場でどんどん意見を出していけば良いかなと思っています。

もう1つ働き方改革の中で富山の全国大会に行った際に文科省の方がこういう話をされていました。今、企業のほうが、働き方改革がどんどん進んでいる。これから社会は働き方改革がきちんとできている会社のほうに流れていってしまう。学校がブラックのままだと受ける人がどんどん少なくなってしまう。今、小学校の倍率は一番低いところで1.3倍、平均で3.2倍。そうすると質の低い人が流れてきてしまう。そうなった時に教育がどうなるのでしょうか。だから働き方改革というのは子供のためにということで、本気でしないと教育界そのものがおかしくなってしまう。ということ強く言われた。そういった意味でもこういったことを学校にアピールしていく必要があるかということも講演を聞いていて思いました。

○深田職務代理者　市長からまちづくりをするときに子どもたちの力があるのではないかという意見がありましたが、どういった力があると思われませんか。

○谷口市長 いきなり難しいことを言っても仕方ないので。ここに丹波市マップというものがあります。これは水道部の職員が水道施設のマップをこのような感じで描いていたのに感動しまして、丹波市の観光マップを描いてくれないかと言いましたら、すぐにこのようなものを描いてくれました。

新規採用職員とランチをするのですが、その時に丹波市内の人でも行ったことありません、黒井城登ったことありませんという人が結構います。中村さんが言われていましたが、自分のところの良さが行って見たらよく分かる。子どもにすら伝えていけないので、私もいろいろなところでPRしていこうかなと思います。水分れフィールドミュージアムなどは3億円かけて来年オープンしますが、丹波市のことを一番語れるのは水分れだと以前から、氷上回廊というのを聞いたときからずっと思っていました。ここと青垣いきものふれあいの里ともつながりますし、横山委員とも十分に連携できる場所だと考えております。そういう取り組みやすいところから、子どもたちに伝えていってやることで、難しい理念よりも伝わると思います。

それから横山委員が言われた大学院生のことですが、2、3週間前くらいに武庫川女子大学の学生が60人くらい来られていました。私が今一番欲しいと思っているのは、丹波市に女子大学が来てほしいということです。そのためにはどんな努力も惜しまないと思っているのですが、どんなアプローチがいいのかなど。

○出町委員 先日、丹波市と関西大学で連携事業を立ち上げているのですが、その総会がありまして、地域連携を考える部署があるのですが、そこの方々が来られて、総合大学なのでいろいろな学部があって、いろいろな専門分野の先生がいらっしゃる。そういう先生方は連携したりフィールドを探しています。「丹波市どうですか」という話もありまして、「丹波市はたくさんフィールドがありますよ」ということを伝えるのですが、具体的なことは資料が手元になかったので言えなかったのですが、そういった資料をまとめておくと、と言いますか学びの素材というのは数多くありますので、地域連携部門はどの大学にもあって、特に私立は力を入れています。そういったところに「丹波市にはこういうフィールドがありますよ」と言っていけ

たら面白い。学生自身もいろいろな場所で学ぶことを求めていることが多い。そういった意味でもそこは丹波市の強みだと思います。

形としてあると良い。

- 谷口市長 兵庫県では防災部門がこれから声を大きくしていくのだと思いますが、南海トラフがどんどん迫っておりまして、70年以内に起こる可能性が一昨年までは70%と言っていたものが今年は80%になっています。

それが起きたときにどうなるかということを経験者30万人、避難者1,000万人で多くの方が家を失うと言われていています。住宅供給公社の社長も田舎で空き家が厄介者扱いされているけれども決してそうではないと言われていている。

丹波の辺りは被害想定震度4から5の間くらいで犠牲者はおそらく出ないと言われていています。そうすると避難者を受け入れる、災害が発生しますと数年単位で簡単には帰れないだろうということになりますので、丹波で相当多くの人を受け入れる準備をしておかなければなりません。そういう話もありまして、そのきっかけとして、まずは都市と農村の交流ということを言われることもあります。阪神淡路大震災のときも有名な話ですが東灘と但馬の山東町が平時から付き合いをされていて、被災した際に真っ先に物資が届いたのが山東町からでした。普段からいろいろなところと連携をとっておく、むかわ町に丹波市がいち早くドローンを持って職員を派遣したこともそれにあたります。むかわ町長はいまだにドローンを持ってきてくれて被害確認に非常に役立ったと言われていています。近隣連携では被災時に同じように被災しているので、遠いところと交流することの意味がでてきます。もし南海トラフでひどいことになったら北海道からも来るし、群馬県からも来ると思います。九州からも来てくれると思います。そういう付き合いがあれば人口減少問題などいろいろな課題がクリアできるかもしれません。

先ほどの竜学ですが、現在、神流町を入れて5市町になっています。他にも「うちも入れてほしい」といった話もきておりまして、全国で30ほどあるのですが、5年後くらいには15市町くらいになったらいいなと思っています。

- 深田職務代理者 人づくりという話がありましたが、生まれてから死ぬまでという人の人生の中で、丹波市がどう関わっていくかということ、そこに地域があり、先生方がおり、保護者がいるという形が簡単には考えられます。教

育委員会ではコミュニティスクールという、何とか子どもたちを支える地域の力として頑張っていきたいというところがあります。いろいろな学校に行って校長先生とも話をするのですが、働き方改革の話もありましたが帰りは遅いです。

もう1つ問題なのは、定年退職でたくさんのベテランが抜けていったあと、新採用を育てる力が学校から薄れてきたのではと感ずることです。新規採用された先生方に力がない先生方がその場しのぎの時間を過ごしているのではという話も聞きました。そうすると子どもたちにとってはマイナス面が多くなります。

基礎学力が落ちてきたとだいぶ前から思っているのですが、先生方自身の基礎学力も落ちてきているように思います。

そういったことを視野にいれながら教育委員としては人づくりの面から外のハード面も気にかけて議論していったらと考えています。

最後は保護者の面ですが、ここにいる教育委員の中で、丹波市で育ったのは中村委員だけだと思います。ですので、自然の良さというのは分かるし、良いところだなと思うことがあるのですが、子どもたちは「山に行ってはいけない」「川に入ってはいけない」自然に触れ合う機会がない。いろいろなアプローチの仕方（川に入る、山に行く、緑に触れる）は我々が考えてあげないといけないのかなという。それは地域も一緒になって考えないといけないかなという思いがあります。これだけ山があるのに山に入ってはいけないという、山に入れば荒れています。上から見たら人の営みが見える景観、山がたくさんあるのにもったいないな、と思いました。中村委員が言われたように子どもたちが希望をもって「頑張るぞ、頑張っていくぞ」というようなことが続くような地域になっていけばと思っています。

○谷口市長 丹波市の歌の「このまちとともに」ですが、これは黒井城や竹田川など一切出てこないのですが、普遍的に思いが伝わればということなのですけどね。これはこのまちにべったりとくっついて長くいてほしいというメッセージではないと、こう思っています。柏原高校のほとんどの子は外に出ますよね。氷上高校の子は半々だと聞きました。氷上西校の子は16人卒業のうち、15人は地元丹波市で就職とのことでした。いろいろなパターンがある

のですが先ほどのグローバル人材というのであれば、もし可能であれば世界中どこでも飛び出して行ってくれと。出て行ったとしても故郷を振り返って貢献する方法はいくらでもあると思います。そういうことで丹波市の歌「このまちとともに」は必ず残ってくれということではないと。大きくなって振り返って貢献してくれることのほうが大きな力になることもあります。

昨年、初めて東京の柏陵同窓会に行きまして、こんなことを言って皆さんから大ブーイングを受けました。「皆さんこんにちは。故郷を捨てた方々」と言うのと「何を言っているのだ」と。後で弁解するのに3分くらいかかりました。必ずしもそうではなくて、東京に出られているのですけども故郷を思っているからこそ、こうして集まっているのだと。そういう方々もおられると。

「NHKみんなの歌になりませんか」と千住明さんに言うのと「紅白歌合戦に行きます」とそこまで言われた。期待しております。

- 深田職務代理者 丹波市の歌が出ましたのでついでですが、まだ認知されていないですね。
- 近藤部長 まだ始まったばかりです。
- 深田職務代理者 うちには100歳体操するとき、その前にずっと流しています。
- 中村委員 それが体操になったら良いのに。
- 深田職務代理者 協議会や会議の前にずっと流されたらどうですか。
- 近藤部長 市の会議のときは、市制懇談会のときなども流させてもらったりしながら。4月くらいからPRを始めたところです。今年度、吹奏楽の楽譜を作りまして、各高校、中学校にもお世話になりたいと思っておりますので、そのあたりで使っていただけるような工夫、それから地域でも使っていただけるような工夫をしていきたいと思っております。
- 深田職務代理者 自治会長や振興会長に強くお願いしてやらないと。
- 近藤部長 CDは自治会全部に配布させていただいております。
- 深田職務代理者 私も持っております。
- 谷口市長 体操と組み合わせると面白いかもしれませんね。
- 中村委員 職員さんは全員聞かれているのですよね。
- 近藤部長 そうです。朝流れております。
- 出町委員 働き方改革の話があって、働き方改革がすすんでいる会社にどん



どん人が流れるという話がありました。昨日大学の研究室で仕事をしていたのですが、そのときに学生たちが話をしてくれて、就職の話がでました。そうすると「ここの企業はブラック…」というようなことが話題にあがっていました。そういう働き方改革について学生は敏感になっているように感じました。私たちのときはどういったことがやりたいか、という話ばかりでしたが、今は環境を大事にしているのだなど。教育長が言われたことは既にすすんでいて、そういう視点で見ているということは危機感としてもっていなければならないと思いました。

いつも言っているコミュニティスクールや地域連携は、働き方改革の中で重要なキーになっていくということで、地域が学校の教育を担っていく、地域と共にあるということです。私は社会教育や生涯教育の場に関わらせていただくことが多いのですが、様々なプログラムをする中で学びっぱなしになっているということがいつも気になっておりまして、学んだことをどう地域の中で活かすのかということが無いように思います。プログラム自体は設定しているのだけれども、そこまでの出口にたどり着けない状況があって、学んだ人たちはいったいどこで活躍しているのか、おそらくいろいろなところで活躍されているのですが、そこをもう少し発信していく必要があるのかなと常々思っておりまして、今回でいえば、学校教育の中で活かせる人材を社会教育の中で育てていくとかです。それから自治会も今大変です。あり方懇話会などもあります。そういった場で活躍できる人材を育てていくとか出口をしっかりと作っていくことが、今年、市民プラザもオープンしますが、そういったところで期待することでもあります。非常に難しいことであると思いますが、是非そういったところでも学びの場を、そういったところに関わる人材育成を。学校の働き方改革につながっていくことで、市長部局と教育委員会の連携で協議していければと思います。

○鬼頭副市長 コミュニティスクールの話がでましたので、ご存知のように市長部局で生涯学習を教育委員会の補助執行でやっております。生涯学習の基本計画が平成27年度に作られて、10ヵ年計画で、前期5年が終わり、今年度以後期5ヵ年の計画を作っているところです。後期5ヵ年の計画のいくつか課題がでていっている中でコミュニティスクールと文科省が提唱している地域協働本部。

そことの違いが今一つ分かっていないのですが、どちらもいかに地域が関わって行くかという話の中で地域がうまく学校に関わって、先生や学校の負担を軽減できるようなことになれば良いということで、働き方改革とコミュニティスクールの関連の中で地域協働本部のようなものを教育委員会としてどう考えていくのかということもまた、どこかの機会にご意見をいただければと思います。

それから生涯学習の中で、教育委員会から市長部局に生涯学習がきて、どうも社会教育と生涯学習の連携がうまくできていないのではないかとか、昔は公民館があって、それが地域の公民館はあったとしても市としての公民館はなくなった。そうすると生涯学習、社会教育の拠点であった公民館がなくなって、そういうものがうまくいっていないという指摘もあって、それが正しい指摘であるのか、もし正しい指摘であるならどうしていったらいいのか。そういったことが後期5カ年の生涯学習基本計画をたてていく中での一つの重要な課題かなと思いますので、教育委員会としてご意見いただけたらと思います。

○村上部長　それでは、予定しております10時半より少し早いですが、概ねご意見等は出尽くしたようです。4番のその他に移らせていただきたいと思います。特に何かございませんでしょうか。

○藤原部長　今年、竜学で訪問する御船町の報告をさせていただきます。

○足立次長　本年度、熊本県御船町を訪問させていただきます。6年生8名。時期的には10月26日から28日に実施する予定にしております。内容としましては現在のところ御船町恐竜博物館の見学、御船町恐竜博物館での体験学習、御船町の小学校での化石を活かした交流授業と熊本城等の被災地の訪問を予定しております。以上、報告させていただきます。

○村上部長　それでは、以上をもちまして第1回総合教育会議を終了させていただきます。

本日いろいろな意見がでました。今回出ました課題を次回も話をさせていただきます。次回ですが、予算編成がございますので、それに向けてということで10月くらいにできたらと思っておりますので、これについ

てはまたご相談させていただいて設定したいと思っております。

本日はお忙しい中ありがとうございました。またよろしく願いいたします。